

編集後記

▽リベロー誌が『アナキズム』に改題し、その時点で新編集部に加わり、個人的には二号目にあたる『アナキズム』四号も、ここによりやく送り出すことができた。

前号から新編集体制のもとでうぶ声を上げた本誌も、遅々としてではあるが、「隔月刊」を目指して歩み始めようとしている。

この間、限られた範囲ではあるが、同人・定期購読者募集の呼びかけを行なってきた。残念ながら、強化された編集部による企画・構成は、まだまだ紙面に現われていないかもしれないが、徐々に新しい内容とともに現実との絶えざる対話を求めた『アナキズム』誌の方向が指めされるであろう。

本号より掲載された「論潮」は、編集部と読者諸兄との接点として、いま現在われわれのあいだで求められている運動・理論のたたき台として広く活用していきたいものである。

前号に掲載できなかった尾関弘氏の「韓国レポート——衛戍令下の韓国アナキズム運動」は、彼独特の対話形式を用いて、ア

ナキズムという立場にこだわらず、平易に韓国の現在の政治・社会状況を、新しい面から明らかにした興味深い読みものである。さらに彼がみずからの「韓国経験」を生かした鋭い現状分析を期待するものである。

(ミヤ)

▽夏のセミナーまでには発行できると思っていたのが、遅れに遅れてしまった。セミナーを終えて、暑さにながらながら編集後記を書くことになったが、どうも印刷部門も順調にいったいない。困ったことだ。

こしばらくは、いろいろと企画を試みていこうと考えている。はたしてうまく定着できるか、否かは未知数だが、この点での読者サイドの意見なり批判を期待したい。編集部の力量次第とはなるが、もう少し頑張っていくつもりである。

次号は、研究センター主催の夏のセミナーを中心に構成する予定である。戦後史の年表も最終回を迎えるし、予告しながらも今回掲載できなかった「クロンシュタットイゼベスチャ」の連載開始など、迄の御期待といいたところである。

ただ困ったことに、財政の問題もあって頁数の制限がかなりきつくなってきた。三

号の請求書を見てビックリ、今号はかなり押えた。量より質の転換を、という意見もなくはないが、やはり今しばらくの間は量を大切にしなければというばかりの個人的な意見を主張していきたい。

最後に、編集同人への参加と、本誌の定期購読(三号分千円・送料含)を、読者の方々に重ねてお願いします。(奥沢)

× × ×

アナキズム 四号

発行日

一九七四年八月二〇日

発行所

日本アナキズム研究センター

静岡県富士宮市杉田二五一

編集部

東京都文京区本郷一―二四―七

現代思想社内 越境の会気付

アナキズム編集委員会